

仙台伊達政宗墓所出土副葬品の保存処置

——受託研究報告 第60号——

中 里 壽 克

この受託研究は伊達政宗墓所から出土した白梅蒔絵手箱の修復処置に関する報告である。この処置は昭和55年度において処置法を実験的に検討した後、昭和56年、59年度において処置を完了した。

伊達政宗墓所は昭和49年に発掘が行なわれ多数の遺品が出土した。漆芸品が手箱、祝箱等約10点含まれ、この白梅蒔絵手箱はその内の一点である。この箱は先に修復した同出土品のキセル箱と同様、出土時に腐朽による破損が著しかった為に、箱内の内容品を確認しないままに調湿アクリルケースに入れ保管されて来たが、状態が特に悪いこともあって保存処置に踏切る事となった。

保存修復のために蓋の漆膜を慎重に除いた所、墨と筆軸の残欠が新たに発見された(図-1, 2)。

墨は巾53ミリ、最大長さ55ミリ、厚さ8ミリ、重量21gほどで、両端で磨られており、ほぼ正方形をしていた。表面に陽刻の文字があるが判読できない。墨の巾が手箱より広いため箱の一方の隅に斜に納入されていた。筆軸とおぼしきものは長さ180ミリ前後で多数あったが、すべて腐朽していた。身箱の口辺部に、丁度スダレをかけた様に横に列並びて巾一パイにぶるさがあった。おそらく水が満たされ筆軸が浮上り、水が蒸発した後も草の根等でそのまま固定して腐朽した様な状態にある。墨のついた毛先も二三遺存していた。内容品は以上のみであった。

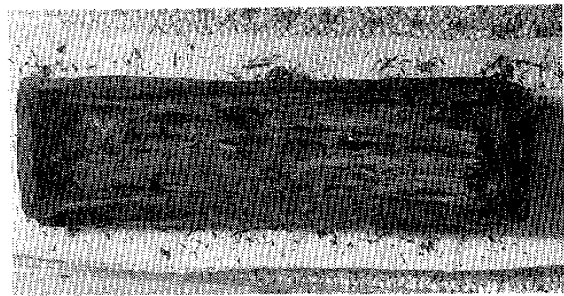


図-1 身箱内の内容品(開箱直後)



図-2 同上 細部(筆軸下に墨)

1. 修復方法について

この箱の現状は以下で詳しく述べるが、素地が腐朽して漆膜のみが変形破損して一塊となっている状態にあり、処置法についてはあまり選択の余地はないと思われた。この様な漆膜のみの状態の物の保存は移植法しかない。移植法は新造した同型の素地に遺存した漆膜を貼付けて漆膜を保存する方法である。

この処理にあっては漆膜に見合う正確な新造箱が必要となる。漆膜を接着するには合成樹脂又は漆があり、それぞれ一長一短があるので、使い分ける必要がある。

2. 現 状

深い被蓋の細長い箱で、身側面中央に金銅製の紐金具を取付ける。

現状は一応の箱の形を残してはいるが、少なくとも蓋は木部はまったく腐朽して漆膜のみとなり、それが所々破損しながら身箱にもたれかかる様にかぶさっている。

身箱は蓋の漆膜に保護された形で、ほぼ概形をとどめ、素地も変形しながらもかなり残存する。しかし漆膜は素地とまったく遊離し、不安定な状態にある。

3. 手 箱 の 技 法

この手箱の法量は上記の様な状態にあるため正確には計測できないが、ほぼ次の様なものである。

蓋	長さ	225ミリ	巾	63ミリ
	高さ	47ミリ	板厚	2.5ミリ
			側面中央に手ぐりをつくる。	
身	長さ	218ミリ	巾	59ミリ
	高さ	52ミリ	板厚	3ミリ

蓋の素地については現存していないのでわからないが、身箱の素地の構造は技法に見るべき所がある。すなわち側板は折箱の構造となっており、四隅では板の内に三条の切込みを入れて3ミリ半径ほどの丸隅に仕上げており（図-3）、板の合せ部分は一方の長側面の中央にある。この合口は特に巧妙に造られ、板の両方の端を5センチほど斜に削って合わされる。外面の板端は側長の真中で切り揃えられている。その切線上に紐金具が取付けられるが、この状態は紐金具の位置を決める中心の当り線の如くに見える（図-4）。

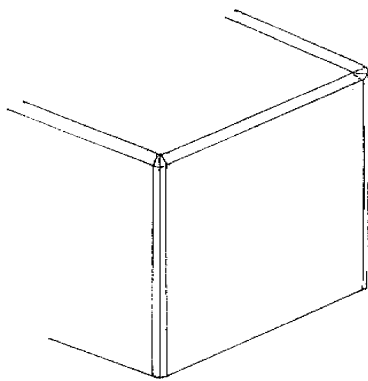


図-3 箱の隅の構造

合せ目の部分は、内板の上端で一部剝離しているものの、他は健全で、あるいは膠以外の接着剤の可能性を示唆している。

底板への側板の接合は、底板の縁廻りを一段くり下げて側板を組込む。更に外側から細い木釘を打込んで固定する（図-5）。木釘の数は長辺で7本、短辺で2本ずつである。木釘は今濃褐色をしているが空木であろうか。

この身箱は今、下地がまったく見られず、素地

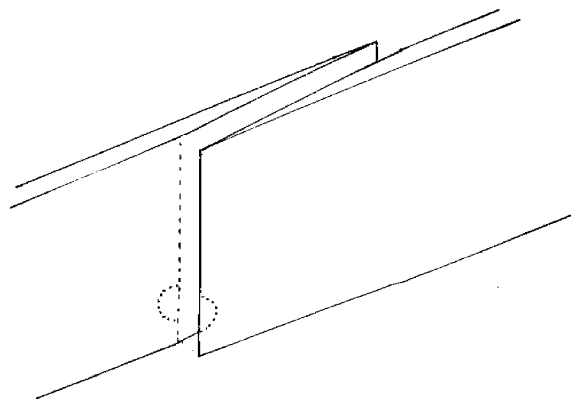


図-4 箱の側板の矧目

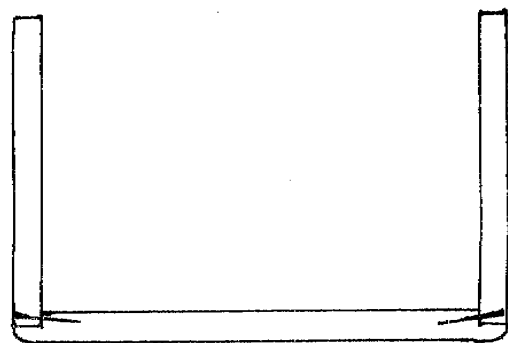


図-5 身箱の構造

のままだが、下地のかわりに薄革を内外全面に貼込んでいることがわかった。革はまったく残存しないが、この皮に漆が直接塗られており、漆膜を透かしてみると皮特有の細かなひびが漆膜に残され（図一6）、又皮を縫い合せた糸の痕跡も漆膜に残されていることで理解できる。外面の革の縫合せの位置は短側面の両端の隅から少しずれた所に設けであり、隅をさけて縫合せたことがわかる（図一7）。ただ内面では外面と同じ位置にあるが、縫合せず、つき合わせるだけである（図一8）。外面革と内面革は口辺部の周囲で、上端の内面、やや下方でつき合わせている（図一9）。この皮貼りの上に二回ほど塗漆が行なわれる。漆はおそらく黒漆であろうが、今は透けて濃褐色をしている。

甲面の蒔絵は平蒔絵で立梅を描く。梅花は銀、枝・台は金とし清楚なものである。

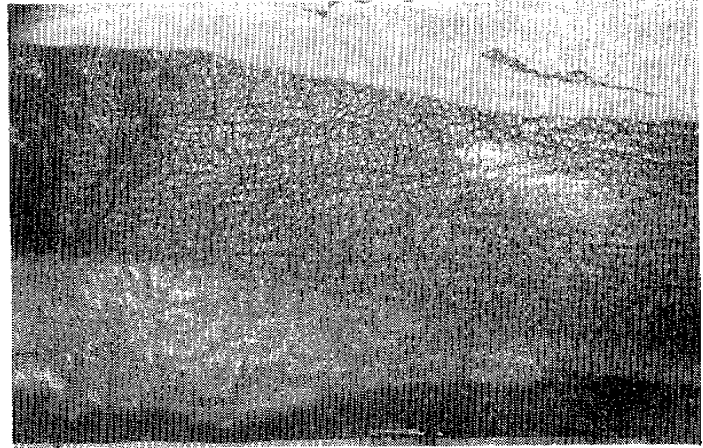
4. 修復処置

漆膜を貼付ける木製の新造箱は檜で別に製作し用意した。この箱の寸法は漆膜の大きさが既に決っているから大きくとも小さくとも具合が悪いが、正確な法量が期待できない状態にあったので、できるだけ原型に近づける努力をした。結果的には1~2ミリほど少さ目になってしまった様である。

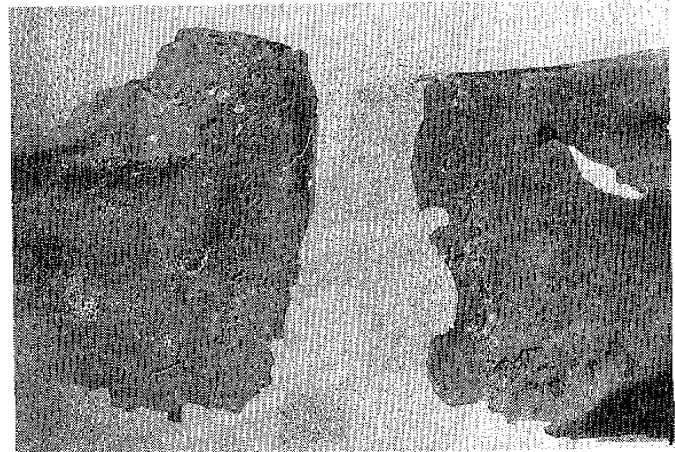
又この手箱は本来前記の様に革貼りとなるが、修復においてはこの工程ははぶき、素地に生漆を薄く塗るだけとして貼付けることとした。

i) 漆膜の採取

蓋の漆膜は前記の様に漆膜のみであるためひどい変形があるので、この漆膜の採取、つまり身箱を覆った蓋の分の漆膜を剝取ることには慎重を期し、できるだけ大きく取上げる様にした。しかし破損しやすく、容易には採取出来なかった。採取した漆膜は短時間の内にカールし



図一6 漆膜のひだ



図一7 身箱外側漆膜に印された縫目



図一8 身箱内面漆膜の革の合せ目

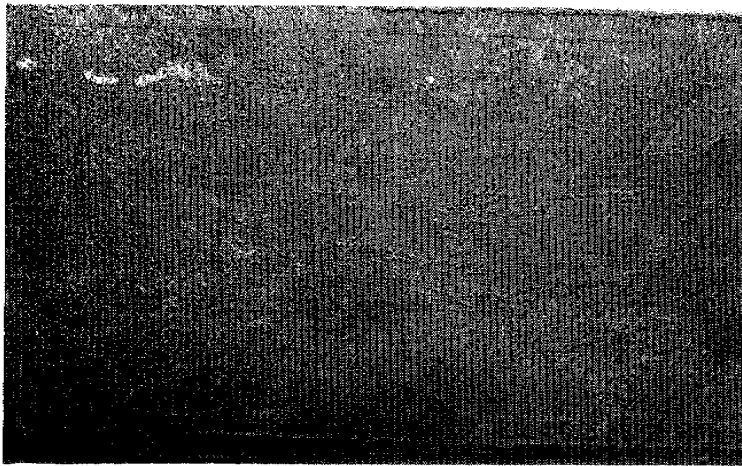
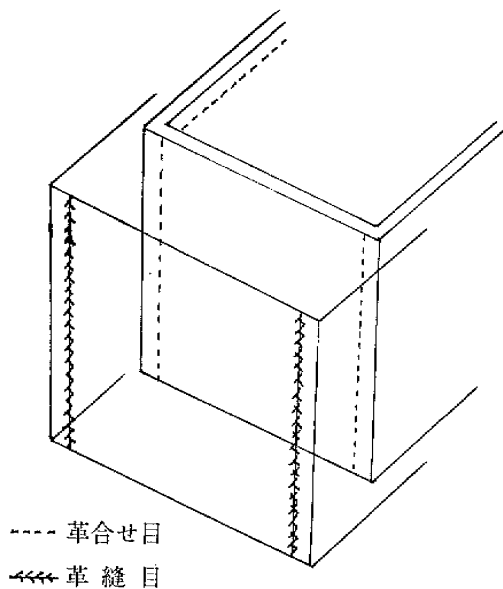


図-9-1 身箱内側漆膜に印される革の合せ目（口辺下）



----- 革合せ目
 <<<<< 革縫目

図-9-2 革貼りの施工図

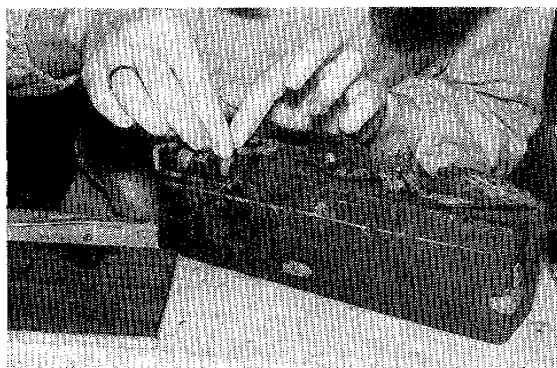


図-10 蓋漆膜の貼付け

たり変形したりするため、塩ビシート薄板に挟み保存した。この様な漆膜は今までの経験では、漆膜の補強と破損防止等を考慮に入れて和紙裏打ちが有効だが、この場合は膜が薄く破れやすいことと、不定型であるため和紙の裏打ちを形通りに切るとは困難であったので行なわなかった。ただし身箱内の漆膜は全体がそのまま採取出来たので、裏打ちを行った。

ii) 蓋漆膜の接着

蓋の漆膜の貼付けは揺変エマルジョンによって行った。貼付けは内面より手がけ、外面に進めた。内面ではまず隅、角の部分より貼付けを始め全体に及んだ。外面では甲面より貼進め、側面は最後に行った（図-10）。

iii) 身の漆膜の接着

身箱の漆膜の接着は麦漆によった。接着剤を揺変エマルジョンから麦漆に変えた理由は、前者が接着剤として不都合を感じたからであり、これについては後述する。

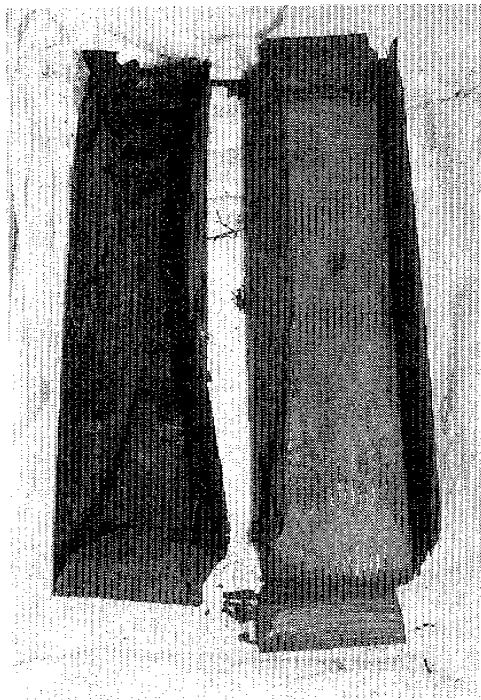
身の漆膜の接着は同じく内面から始め、外面に進めた。身箱は素地が比較的健全であった為に、内面の漆膜はほぼ全体が破損せずに採取出来、これを一回で一気に貼込んだ（図-11, 12）。

iv) 漆膜接着の技法

揺変エマルジョンによる漆膜の接着は、先に伊達政宗墓所出土品のキセル箱の修復で使用しており、この手箱についてはその延長と考え、揺変エマルジョンを再使用したが、キセル箱漆膜貼付け処置において生じた揺変エマルジョンの湿度による膨潤の問題は解決出来ずに、この手箱の蓋の場合も同じ苦勞を味わうこととなった。すなわ

ち、漆膜断片と漆膜断片の間に出来た僅かの間隙に揺変エマルジョンが露出していると、そこを埋めるに用いた漆下地の水分によって揺変エマルジョンが膨潤し漆下地は固定せずに施工が進行しない。結局非常な苦勞をかけてこの揺変エマルジョンを除去するほかに方法はない。

アクリル系接着剤は使用が簡単で可逆性があるので文化財修復には理想的な材料だが、漆芸



図一11 身箱素地と内面漆膜

技法を伴う場合は膨潤する欠点を考慮に入れる必要がある。

麦漆による漆膜の接着は、伝統的方法であり、その効果は今までに充分確かめられて来ているが、接着に時間がかかること、漆による汚染が心配なこと、可逆性でないこと等の欠点を持っている。

この手箱の身の漆膜の接着は、蓋での経験を踏まえて麦漆で接着したが麦漆は麦漆で実際の運用は難しい。

漆膜を貼付けるに際して、麦漆を漆膜に塗付して貼る方法は良策ではない。この手箱の様に漆膜が薄い場合は、麦漆によって漆膜が極端にカールし、貼付けに大きな障害となる。やはり箱の方に麦漆を塗付し、漆膜には充分な湿りを与えておいて貼付けた方が貼り易く乾固後のトラブルも少ない様に思われた。

漆膜の接着の際の押えは主に油粘土によったが一部紐と楔による方法もとった(図一13)。

v) 欠損部の処置

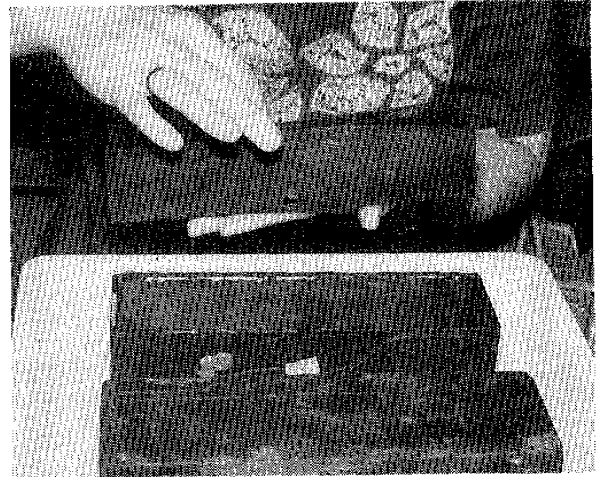
前記の様に蓋では漆膜欠損部の揺変エマルジョンの除去に手間取ったが、これらの部分にはヘラで漆下地を薄く充填し、その上に陽取り漆を数回塗って仕上げた。身箱も同様である。

最後に原箱に遺存した紐金具を取付けた。

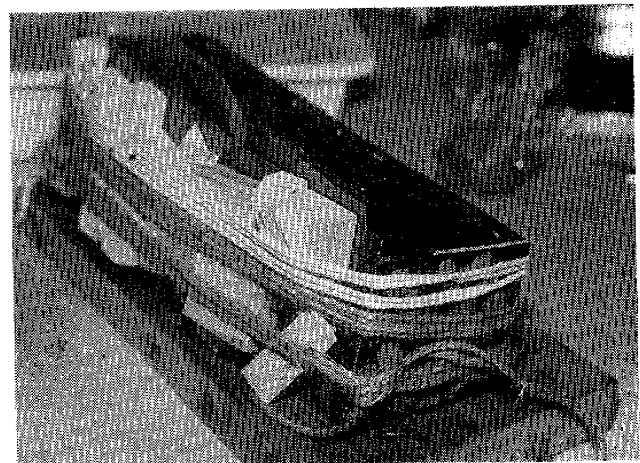
5. 原身箱と内容品の保存処置

原身箱は一応箱の形を成しているが、一部破損剝離が生じて不安定であったので、そこには大和のりで和紙を貼って養生し、地色と似せて着色し、アクリルエマルジョンを浸透させて若干硬度を持たせて支えとした。

腐朽している筆軸類にはアクリルエマルジョンを浸透させ強化するにとどめた。墨は未処置



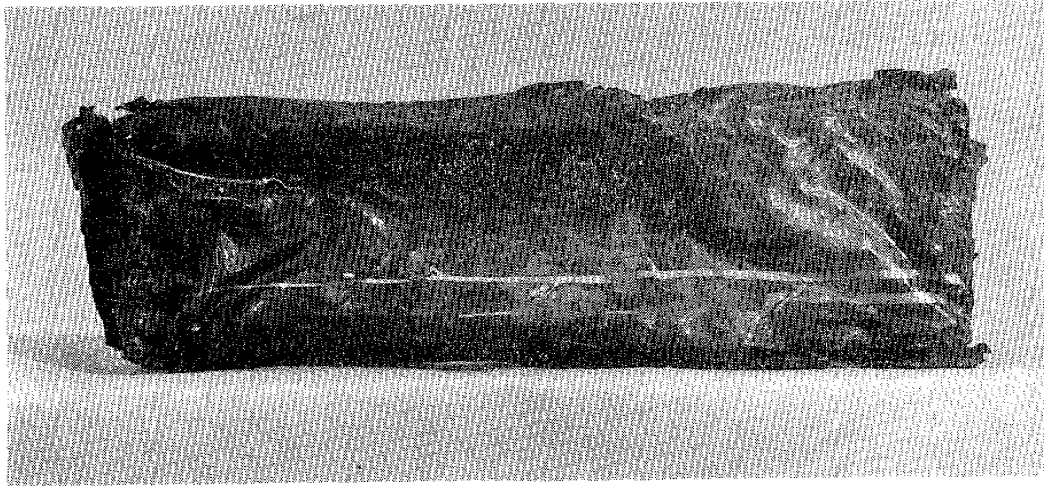
図一12 身内面漆膜を新造箱におさめる



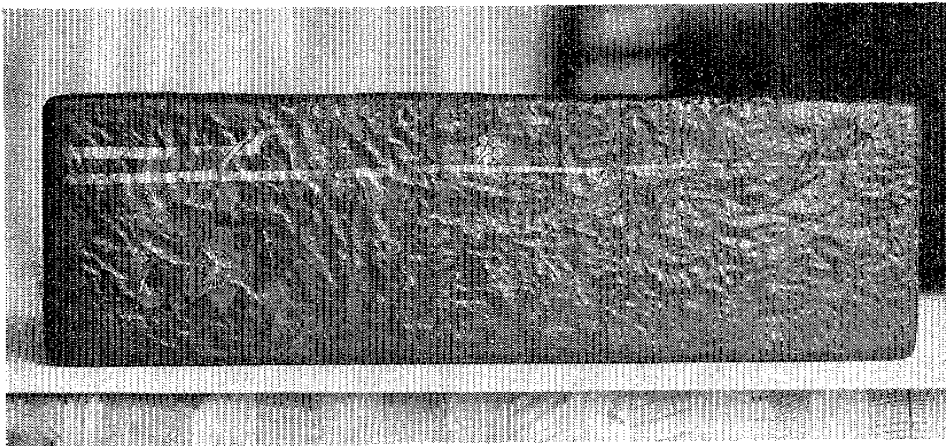
図一13 身箱外側漆膜の貼付

である。

終りにこの受託研究については仙台市博物館，嘉藤美代子氏に御世話になり，又保存処置については新井榛名氏を煩わせた。両女史には紙上より深謝致します。

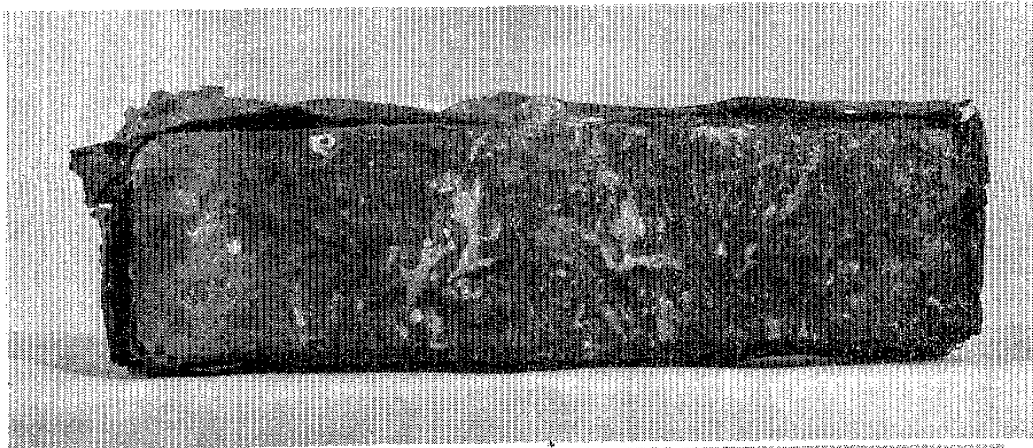


処置前

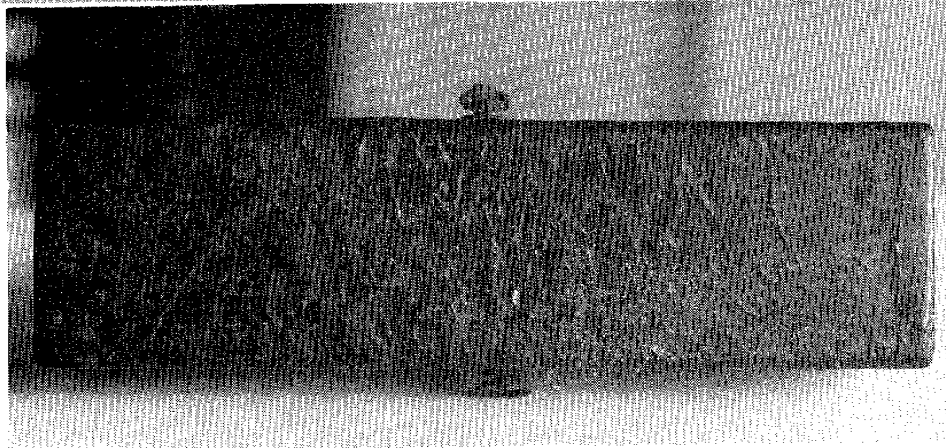


処置後

付図-1 甲面

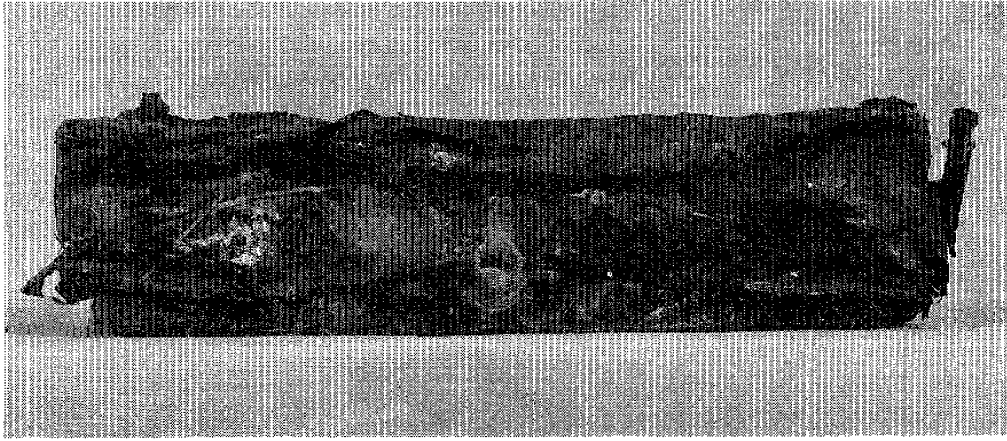


処置前

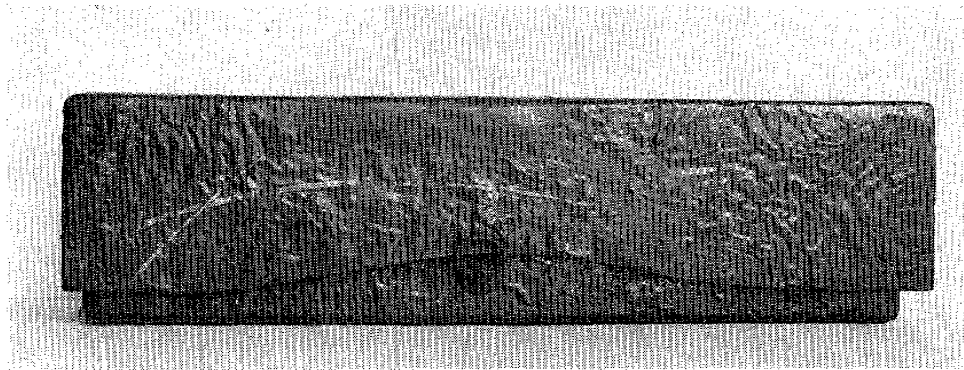


処置後

付図-2 底面

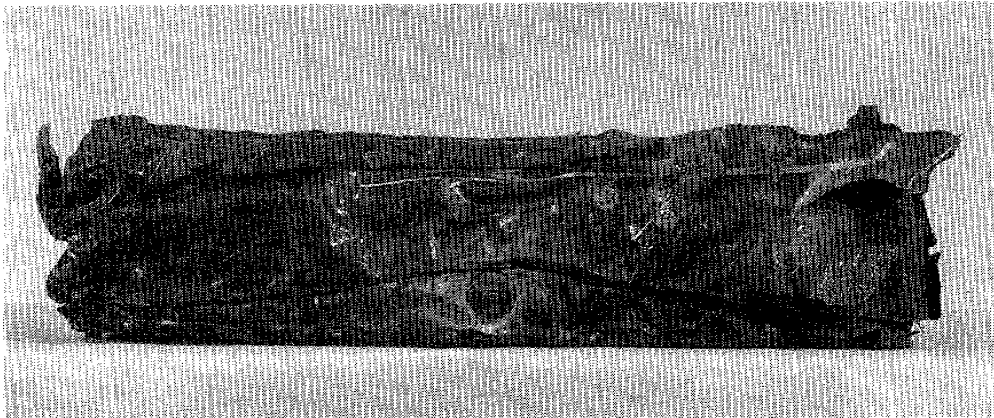


処置前

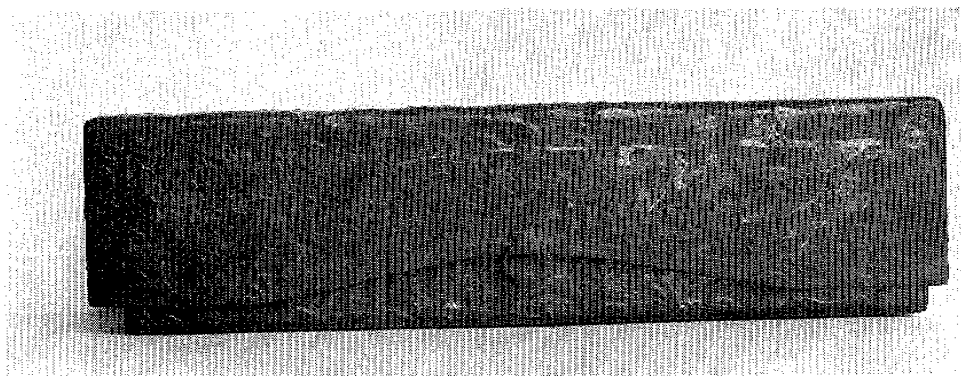


処置後

付図—3 側 面

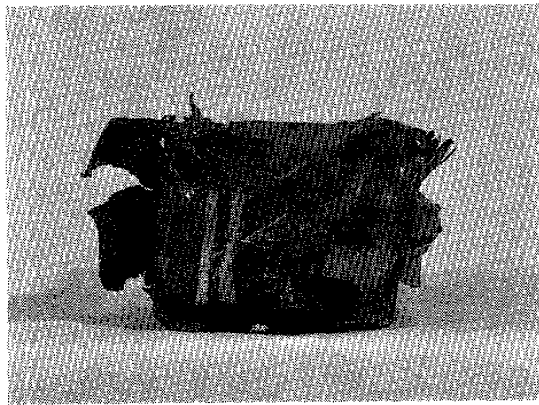


処置前

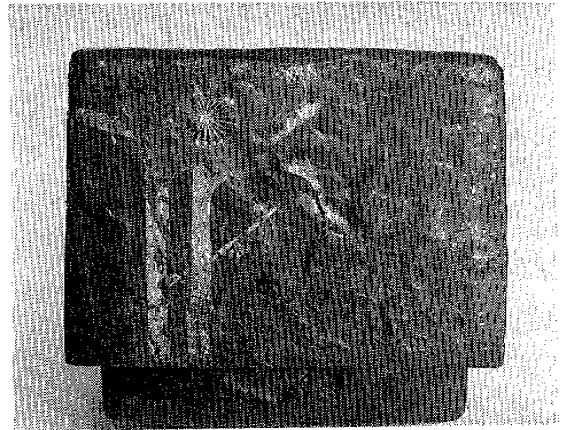


処置後

付図—4 側 面

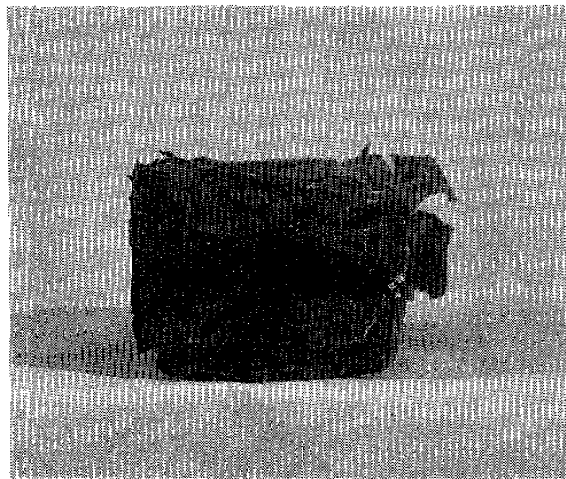


処置前



処置後

付図—5 側面

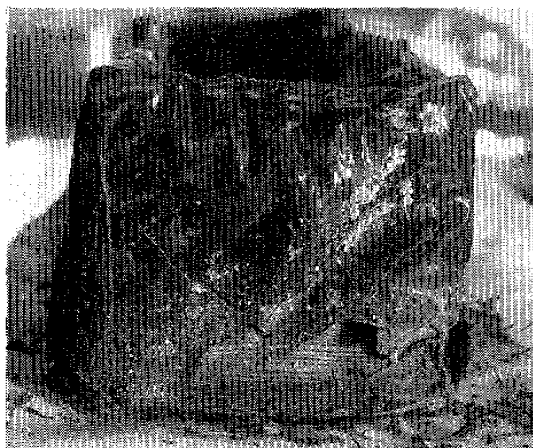


処置前

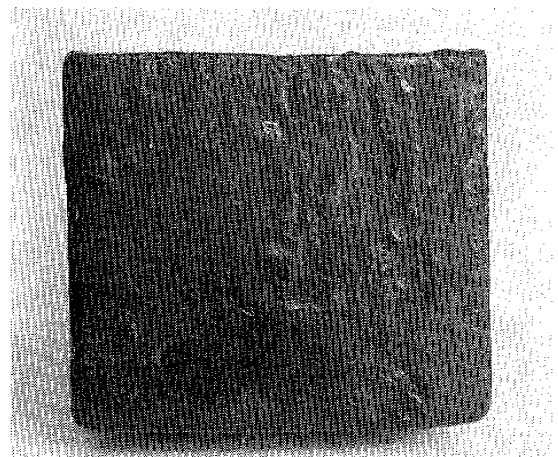


処置後

付図—6 側面

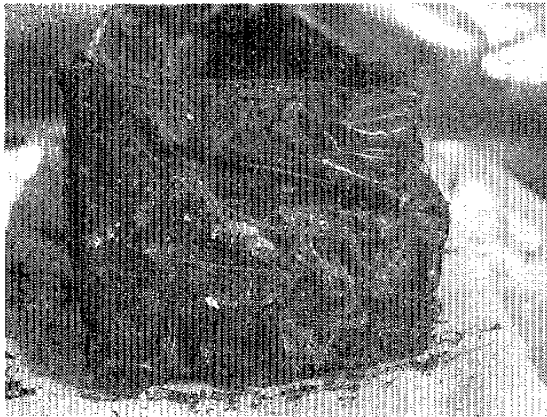


処置前

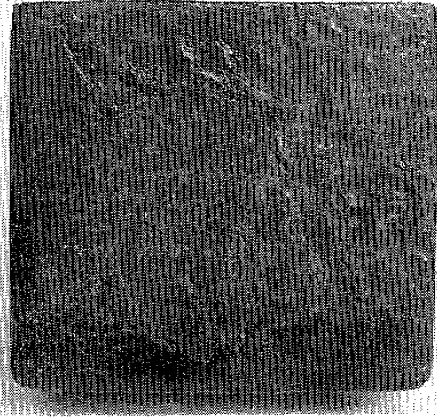


処置後

付図—7 身側面

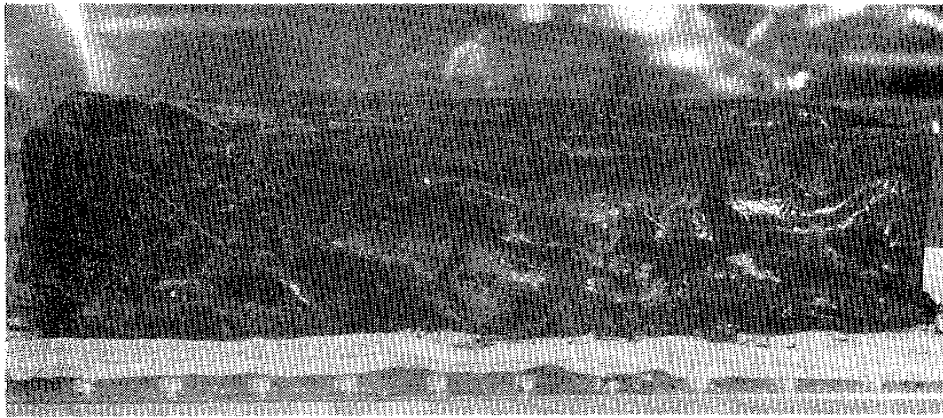


処置前

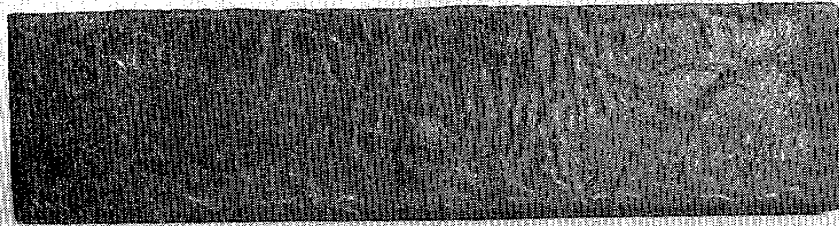


処置後

付図-8 身側面

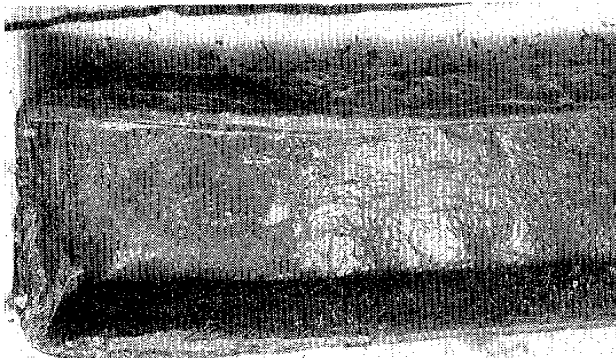


処置前

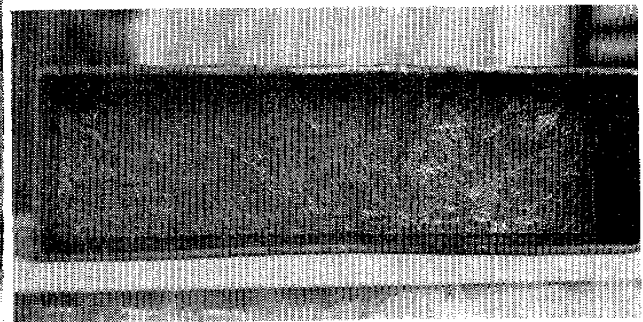


処置後

付図-9 身側面

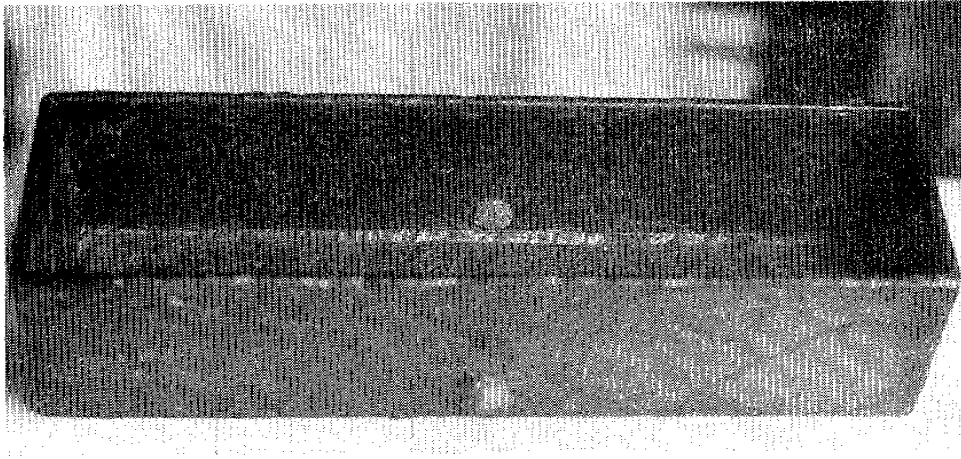


処置前

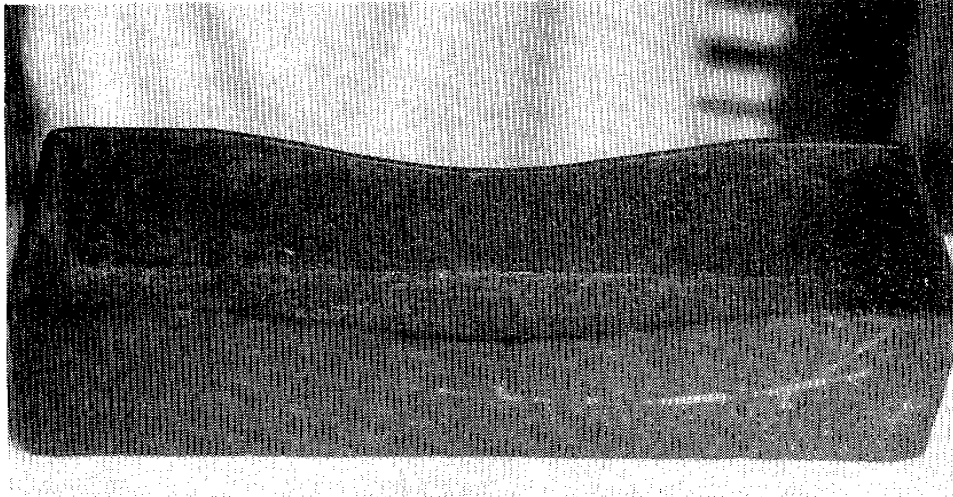


処置後

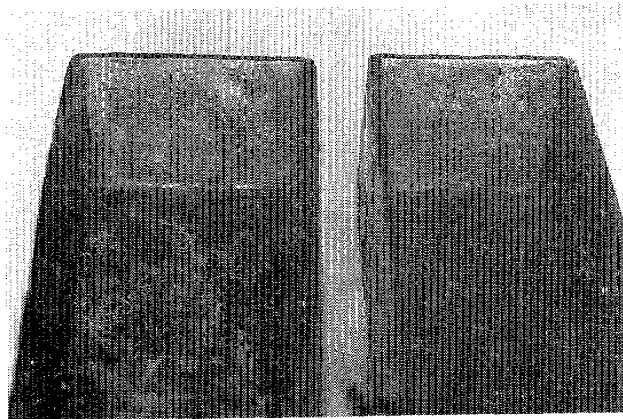
付図-10 身見込面



付図一11 身内側面（処置後）



付図一12 蓋内側面（処置後）



付図一蓋及身内側面（処置後）

Restoration of a *Makie Tebako* Excavated from
the Tomb of Date Masamune

Toshikatsu Nakasato

The size of the box is 225 mm (length)×63mm (width)×47 mm (height). On the surface of the lid, which was made to cover even the sides of the box, is found *ume-makie*.

When excavated from the tomb, the wooden part of the lid had already deteriorated and was missing and only the *urushi* layer remained on the top of the box itself.

The body of the box itself had deteriorated slightly but the box retained its original shape to a great extent. However, the *urushi* layer had all separated from the body. In order to preserve this layer of *urushi*, a wooden box of same size was made and the pieces of *urushi* layer were adhered to it. Thixotropic acrylic emulsion was used as adhesive for the lid, but since it was not considered appropriate, *mugi-urushi* was used to adhere the *urushi* layer to the body of the box itself. The reason for this change was that when we restored the lid by applying *urushi shitaji* to the missing parts of the original layer of *urushi*, the acrylic resin swelled, making the restoration of the missing parts difficult.